

特 72

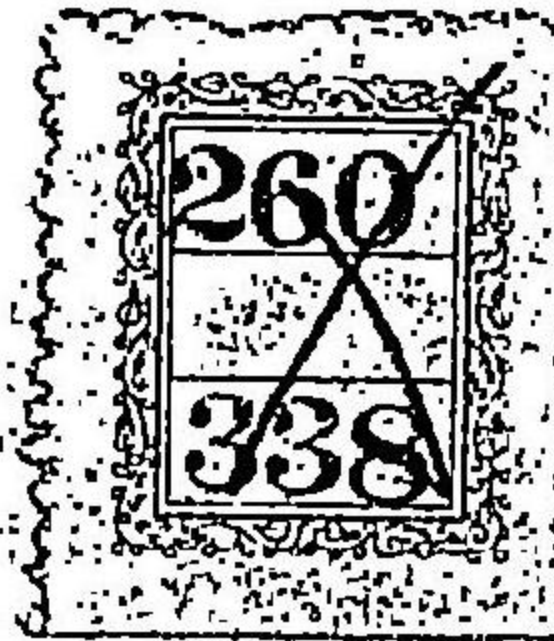
54

東京家庭學校長留岡幸助先生口演

報徳と四大要綱

三宮翁の社會的理想

南信雜誌社發行



301596-001-0

特72-54

報徳と四大要綱

留岡 幸助 / 述

M42.8

AAF-0001



報徳と四大要綱

及二宮翁の社會的理想

目次

第一、總論……………一頁

農村の國家に於ける位置

第二、報徳と其四大要綱……………十五頁

一、至誠……………二十二頁

二、勤勞……………二十六頁

三、分度……………三十八頁

四、推讓……………四十二頁

第三、二宮翁の社會的理想……………四十九頁

目次終

特72
54

本年三月我上伊那郡斯民會の組織成り發會式を舉

るに方り内務省派遣員として家庭學校長留岡幸助

生の臨席を得たるは寔に本會の光榮たり而して先

は本會の希望に依り引續き開會せる講演に於て報徳

主義に關する深き蘊蓄を披歴して我郡人士の爲めに

國民としての地位を説き以て其自覺を促し報徳四大

要綱を論して斯道の要義を明にせらる蓋し故二宮先

生の遺教以徳報徳の道たる時代と相照應するここを

知らざる輩に於て往々愆らるゝここ多く常に以て遺

明治30年9月
42 9 30
内交

憾とせる所なりしが連日に渉れる先生の講演に於て
克く其愆りを講明し盡されたるは斯道の前途に光明
の輝々たるものあるを覺ゆ本書は即ち先生の講演を
筆記したるものにして本會の依托に依り南信雜誌社
の速記刊行せる所なり希くは社會改良に志あるの士
本書によりて學ひたらんには又以て自得する所多か
るべし。

上伊那郡斯民會

報徳と四大要綱

及三宮翁の社會的理想

留岡幸助先生講演

本篇は明治四十二年三月二十四日より同二十六日に渉る三日間上伊那郡斯民會第一回講演會に於て先生が講演せられたる筆記にして其校閲を経たり。

第一 總論

……農村の國家に於る位置……

御話しを致しまする前に申し演べて置きますが、本日
の發會式に續きまして三日の間、引き続き致します所
の講演を致します。
二宮尊徳翁のこと及び夫をに因みました我國及び西洋
各國の道德經濟に關することに就て御話しを致します
、夫を以て今日申します事は序論或は總論となすと思
ひます、少なをも今日御出席の方は連続して御出席
になるやうに願ひたい、私の後では東京で有名を眞龍

齋貞水君が非常に多忙を以て出て来てくれました
から、是非伊那町の方は娘さんなどお婆さんあり繰り
合して御出席にあるやうに致したい、私の話とは或は
六ツかまゝいかも知れませぬが貞水君等は學者も無學者
も娘も年寄も誰にも能く判る話して下さると思ふ。
私は前申述べしたる趣意、範圍に於て御話しを致しま
するが今日申します事は、農村の國家に於る位置と
いふ趣意となります。

世の中の人々の言ふ所を聞きますると、都會は善いが田舎は何うも詰らなぬと、斯ういふて居る、又東京邊や大坂邊の人から農村の人を見ると、或は赤毛布或は田舎者だとか輕蔑また口氣を洩して居るが、農村の人を見ると農村の人自らも又自尊心が足らぬと思ふ、何所でも田舎人たる事を恥るやうな氣味があるに思はれる、私は一年に約半分以上農村を調査し講話して居りまするが、私れ目よりは何うも自から卑下して居るやうと思ふ、然し斯く自から卑下すべきもれでなく又都人の考ふる如きものでない、農村の人自から謙遜する程詰らなぬものでない、農村は國民の尤も血液の善い所で身体に譬ふれば尤も純潔ある所があると思ふ、日本帝國とは一体何所をさまで言ふ、東京をさまで言ふか乃至大坂か京都か名古屋か横濱か神戸か、爾うでない、日本帝國といふものゝ百分比例を取て百分の八十迄は農村である、都會といふもれ大都會といふものは指を屈するに足りない百万以上人口を持て居る所は少ない、日本帝國の大体は農村で出来て居る、明治二十二年に市制及び町村制が出来た時の内務省の統計によれば、自治の制を布てあるのが一万二千五百六十六ある、その二万二千五百六十六の市及び町村の大部分

ハットにフロックコートを着て居る、私共も嘗て英國に居た時は仕方なしにシルクハットにフロックコートを着て居ましたのか私は此の當時のシルクハットは我家の寶物になるぞと言ふて今では笑つて居りまするが、此のシルクハットはフロックコートは日本の武士か二本さして武士に二言なしと言ふたと同其事であります、そこで何故農業が衰へたかと言ふに夫れは体格が衰へて来た、農業が衰へた爲に体格が衰へて来た、最う一つは失業者が澤山出来たその無職業者は出来たのは其大部分は農村の衰へた爲に失業者が殖て農村に住むことが出来なくなつたので大都會へ上つて来た、その大都會へ出て来た者は何うするかといふに、皆夫れ々求業して居るか何うも業かない、今日では冬季になると三千人とか五千人とか或は一万人二万人と揃つてロンドンの町を練り歩いて町の中の公園で示威運動などを行つて我に職業を與へよなどといふ演説をして騒がして居る、ロンドンの警察は恐らくは世界一で知らうが、其警察が二つ寄てもこれ程始末することが出来ぬ、英國の國會の大問題は此等失業者は何うするといふ事よ心痛えて居るのであります、佛蘭西や其他の如き社會主義者は幸ひにしてありませぬ

は村であつて市とか町とかは極僅かなもので、其大体乃ち百分比例で八十迄は村で占めて居る、故に農村の消長といふものが日本帝國の消長に影響するおどになる、何うしても農村及び農民の進歩が退くか其盛衰が移して以て國家の盛衰に大關係ある事になります、そこで農村及び農民の國家に於る關係が尠くありませぬ、近來農村と盛んになりつゝあるか何うであるかを研究するに西洋各國の進歩した文明の傾向から行けば、都會が意想外に發達して農村と衰へて居る、此極端な比例は英吉利である英吉利人口の割振は英帝國の人口の三分の二は大都會に住んで居つて三分の一が英帝國の農村に住んで居る、今から二三十年前迄は人口は三分の二は農村に住んで居たものゝ二三十年の方でと人口の三分の二が都會に住むやうになつて終つた、其原因を社會學者が頻りに研究して居る、其原因は色々ありまするが大なる原因は一は英吉利は農業が衰へたのであります、一は英吉利は何で建て居るかといふと商工業で建て居る、英吉利商工業の發達して居る所はない、元來ゼンツルマンといふ語は英吉利は商工業者に付けた名である、英國は商工業者は嘘を言はぬ人と約した事を必ず守る英吉利の商賣人は不斷シルク

が、此失業者の多いに之懲り困つて社會學者などは深く研究して居りまする大問題となつて居ります、最う一つ農村の衰へた結果は貧乏人が出来て来た、此貧乏人といふても日本人には一寸判りませぬが、ポーランドといふ字を使つて居る、乞食ベツガースの間は澤山出来る、これも又救貧法などいふやうなものを出すやうに成て居る、これか英國の社會問題でありませるか、隨つて泥棒なども多いて英國では困りぬいて居ります、そこで私は世の中て農業ばかり發達すれば善いとは言はぬか健全なる商工業の上に於て農業が發達すれば宜しいといふのであります、英吉利では極端に商工業が發達した爲に前に陳べましたるが如き大問題が起つて来たのであるが、そこで英國の農業も元のやうに立て直るかといふ事に就て見るに、ツランスバールであるとかいふ所に移すとかいふ方法もあらうが、兎に角に社會問題の大なるものであります、夫れで近來ロンドンで出来る本は殆んど皆此の問題ばかりだ、エドモンズブラットといふ社會改良に骨を折て居る人の書物に就て、ページを分拆する程細かく讀みませぬが此書物は假綴で一圓五十錢位でなければならぬ本を、只五十錢で買て居る、これは英吉利の篤志家が此

衰へて居る農村を恢復することに就ての本は可及的廉く賣て多くの人に讀ませたいといふのでこれを補助して居るにであります。そこで此の本の表紙が面白い、英吉利は若い者が労働着を着て居る、女の神の石像が七分三分に目をつぶつて居る夫れを、若い衆が井戸繩見たやうなもので引起して居る所か書いてある、この女の神様と一体農業の神様とあるといふ事でありませぬ、農業が衰へて七分三分に行つて居るのを引き起さぬばならぬといふ面白い意匠である、英吉利帝國は農業の衰へた結果國家の安危に係つて居ります、これと單り英吉利のみならず都會は凡て暴大を發達をして居る、これが社會問題の有名な問題と成て居ります。

そこで我國の有様は如何であるかといふに、我國でも英吉利や佛蘭西のやうな大袈裟に衰へて居らぬか我國も又衰へて居ります、今から十年前迄は農によりて直接間接に生活して居た者が百分の六十で居つたものか、十年この方で之百分の四十八と成て十年この方十二人減つて居る、此の百分の十二の人間は必ず都會へ出て來たに違ひない、年々農村の人口が減りつゝある、此の減りつゝあるのは農が衰へる事を証明して居るのであります、昨年貞水君と一所に新潟縣へ参りま

したが新潟縣は未だ百分の七十ある、直接間接に農業で生活して居る者が百分の七十あるから新潟縣の前途は有望であると話をした事かあります、御縣之未だ調べてはないが山國であるから多い事だらうと思ふ、日本で尤も農村は人口は減る所は宮城、富山が著しく減つて富山縣の如きは一年に六千人位小作人が減つて行々、これは大地主と小作人之間に管理人がある、自分では富山の町に住んで居て妾宅などを置き自分村へは歸らず一切此の管理人任せにして置くやうな事だから地主と小作人と段々隔離する事と成て、かくの如き一年に六千人も減つて終り事になる、宮城縣なども六七千人位減る、これは多く北海道へ行つて終る、或大地主の如きは半年に百町歩の土地を返さして終つたといふので、内務省から命せられて私は一昨年態々出かけて行けた事があります、奈良縣を去りても宇陀郡の或一村は住民が皆大坂市へ移住して亡村となつて終つた事實がある、私と農村の衰へる所以を段々研究して見るに、如何も奢りが増長して來る、奢りが増長すれば金が要る、金が欲しいと思へば農業などに盡力して居れなくなる、何故暇をば農業利益の少ないもればよい、夫れで商業が工業に従事する事になる、

或人に聞て見ると如何も仕方がないから農業減して居ります、若し私に給料を取る技術があれば、何時でも都會に出て行くといふて居る、斯ういふ農業家も少くないやうであります、夫れで農業を厭ふ様になると人間が柔弱になる、假令は東京でも山の手から一面に電車といふものがある、五錢氣張れば足を使はず濟む未だ其外に自動車とか自轉車とかいふものがあつて、兎に角身体が柔弱にすることが出来るやうに成て居る、モウ今日では道を一里歩行くことを東京の人間は篋子や確水でも越る位と思つて居るやうになりました、近頃東京では徒歩會といふものが出來た然ういふ連中が腰辨當かなどで車や電車に乗る者の悪口などをいふて演説をするやうな示威運動をして居ますが、おれは段々人間が柔弱に成つて行く一つの反動が起つて來たのであります、これと只一つの譬でいあります、人間が柔弱になる結果雷に足を使はぬのみならず、其他口で言ふことでも電話とか電信とかいふやうな器械力ばかり借るやうに成て來て、終いには人間が皆塵にでもおろはせぬかと思ふ位である、又假令は賭博を打つ奴が段々進んで來て張つたり取つたりするれと倒面臭いからといふので、詐欺取財やら泥棒強盗する奴

が殖て來る、これは勞力を嫌うといふ結果斯ういふこととあります、デ色々考へると各種の影響がある、農と色々業に比べて儲からぬと言ふが、農程健全な愉快なものもあるまいと思ふ、又私と農業程儲かるものはあるまいと思ふ、一粒の粃が百粒も百五十粒にもなる、藥九層倍とこのものではおとせぬ、只色々云ふから間違がある實は農業は利益が多いものであるに、農業を廢して他の事業に移るなどは前途憂ふべきものであると思ふ、私何時も然う思ふ、地球の表面に於て人間が船に乗る、夫れが相當に片寄らずに乗つて居ればよいけれど、若し片寄つて乗る事となれば其船が覆へることになる、夫れと同じ事に國家も又あるべき所に人間が相當の割合に居らねば國家が健全の發達を遂げる事か出來まいと思つて居ります、羅馬は何うして亡びたか、羅馬は今より二千年前に世界に雄飛したものだ、人間荷くも人と生れたら羅馬市民たれと言ふた位のものであるが、其羅馬府が餘り大きくなり過ぎて國より以上發達した爲に伊太利の國が亡びる事になつた、其他バビロン、アッシリヤ、ギリキ皆其通りである、都會といふか都會に住んで何が善い事がある、人間が無性お成て煤毒か詐欺師が

神經衰弱か、大概是皆さうなつて終う百人中七八十人迄は皆墮落して終うに極つて居る、夫れが証據には都會七十年居た人間の歸つて來た者を見ると、皆風俗の悪いものと成て居る、仮令ば工女と見ても然うだ大坂や東京は紡績工女に行て居る、最初行く時には純潔な善い處女であつた者か、五年七年居ると今度は精神か横着て都會の悪い風俗のバチルヌを持つて歸つて來ることになる、故に或郡長等は郡界より外へ工女を出さぬといふ方針執つて居る人もある位だ、これと唯單り工女のみならず堂々たる男子にして又然うである、第一に先づ身体が弱く成る、此身体が弱くなつたら何んにも出來ない、私に汝は頭で話しをするかと言ふ、私は私の十分の七八までは体力をやつて居る、健康といふ事は私より離すことが出來なものであります、農業の如きものは殊に体力にありべきものであるが、徳川時代は農業より今日の農業は鋏の打ち込み方が浅いと云ふおどだ、これと決まて私見でないと思ふ、鋏の打ち込み方を浅くして夫れで餘計收穫しやうとしても出來る道理が有りませぬ、夫れで或縣の農事將勵實行事項には鋏を一寸深く打ち込む事とか鋏を大あくする事と、いふやうな事が書いてある有様であ

六
ります、今参りまして國は礎といふもれを頂戴して見ますと、横井博士は言はれまされた此の農民たるものは國民の模範的階級たるべきものと心得武士道の相續者で以て自ら任事自重の心懸け肝要は事
これと私の極力賛成する所でありますが、花は櫻人と武士と言はれまされた其如く、日本全國の腐敗を農民の道徳を以て矯正して行きたひ、日本古來は武士道は今後農民に於て相續する事にしたものである、東京のやうな所は三つや四つ腐敗しても百分の八十ある農村さへ善ければ構いませぬ、仮令ば希臘のアゼンス此所らても腐敗して居るが信州見たやうな山國のアルケリヤ或はフリドン等を等は自由といふ思想が發達して居る、私は一番善い國はといへば瑞西國であります、一體英語のランド、之を土の塊をりといふ意義であつて、英國の内でも蘇格蘭、このランドといふ名のつく山はる則ち土の塊をりの澤山ある其國は、道徳堅固に行つて居る、世界の中でも山間僻地程道徳が進んで居る則ち農村程道徳が堅固に行はれて居ります、天の徳と人の徳と合して始めてウマク行はれるのである、そこで体力が則ち道徳を守つて行はれる事になる

横井博士の所謂武士道の相續者と以て任事なければならぬといふれか尤も宜しい、私の説く所の社會改良の見地から見ると、農村といふものは國家の上に重大の關係あるものであつて、而かも百分の八十ある以上は實に國家の元氣國家の血脈である以上、山間僻地といふても卑下すべきもので有りませぬ、夫れを昔の名君賢人は如何に觀て居るか、これは最う一時間程かゝらねば説く事が出來ませぬ、本日は時間も迫つて居りますれば、明日午前にこの後を一時間程御話をして夫れから本論に入る事に致します。(二十四日午後三時四十五分より全四時四十五分まで)

昨日の續きを御話し致します、我邦の昔の名君賢人等は農業に對しては如何なる考へを以て居られしか又二宮翁は如何なる考へを以て居られしかを御話し致します歴史に就て調べて見ても我國の列聖は何れも農業を以て國是として居られた、何時の世に有りても何れも重農主義を取て居られたのであるが農民其ものは何時も重せられなかつたのみならず寧ろ輕蔑せられた、徳川八代將軍吉宗公の如きは大に農業を重せられた、又彼の有名なる大岡越前守の如きも刑事上の事のみならず農事にも盡さをた人で居る、彼の青木昆陽を以て甘

七
薯の栽培を研究せしめ其成績が公にする費用を支出されたこと云ふことであります、大岡越前守が此の如く農事に盡されたれも矢張り吉宗公に感化されたものであろうと思ひます、之を以て見ても其當時の民政上取られたる方針の一端を窺ふに足ることと思ひます、彼の白川樂翁公の如きも行政上の基礎を立つるに大に農業の状態を参考せられたるものと思ひます、水戸の西山公の如きは自身か農夫となりて辛苦を試みられたさうであります、公の常に住まはれた西山の別荘は全く一農家と異らざるものであつたのであります、其頃公は農の國民は嬉である云はれたさうであるか國の雄即ち國民の雄であると云はれたのであります公は又農人形を造りて毎食事前に一箸の飯を供されて農民の辛苦を忘る様になされた此の如くに重せられたのであります、農業は人間の衣食住の基礎を据えらるゝものであります、世間の宗教家又は道徳家は衣食住のことに心算を寄せることは宜まからずと申されまするか之れは間違ひたる論だと思ひます、宗教も教育も衣食住の上に立つものでなくてはならぬ、經濟の上になつた道徳でなくてはならぬのであります、人間は肉體を以て居るものである肉體は衣食住の塊りであ

より外はあり、農民を指して汚ないといふのは詰り人糞を始末するからであると思ふ、然るに私は農民は實に尊き職分を荷ふて居るものと思ふ、寧ろ奇麗なものを扱ふもの共の嫌うものを處分するといふのか尊ひと思ふ、二宮翁の歌に

世の中に人のすてざるなき物を拾ひ集めて民に與えん

これは中々面白いと思ふ、實に美はまゝ歌だ人糞を棄てたものを拾ひ集める、農業といふものは世の中に人の棄てざるなき物だ拾ひ集めるのである、

夫れを卑しい所の仕事であると思ふのか間違て、これを卑しいと蔑んで居る都人士も又大間違である、仮令バ私か不良少年の感化事業を起して巢鴨で家庭學校を建て居る、或時富豪が来て不良少年の感化事業といふのと何ういふ風にするかといふから、色々説明して書類を見せてやると、これは中々面白いものだと思ふ、其後で言ふよ、留岡サン貴君はあれたに似合はぬ仕事をして居るていなぬか、何とか外に幾らもやる事かあるてとありやぬか、と言ぬので私は理由として斯ふ答へて置きませた、世の中には人の好き無好きかあつて同窓小鳥を飼うにまでも篤か善いといふ人もあ

農民といふ天職は輕々しく考へてはなりませぬ、此の意味に於て農民といふものは國家乃土台であることか解る、只金といふことにはばかり目孩くれるから都へ出て行て何か一儲けしよう、農業を棄て居ては逆も駄目だといふか、農業は金儲けかないと言ふれば夫れは近眼もの、言ふ事である、農民は他の商人や何かれやうに上つたを下つたり大波瀾を起すやうな事かなく實に安全堅固な職業である、或人か金かなくて詰らぬと言ふて居りますか、初等教育で有名な人の「ペストライツチ」か斯ういふ説を立てた事かある。金持といふもの金の外何んにも持て居らぬ最上の貧乏人である、こりや餘程面白い説であると思ふ、私は自分て持て居らぬか必要を時には誰か出まてくせぬ、貧乏人には相違ないか何も金ばかりか富だと思ひませぬ、身体の健康なのも富、信用も富、品行方正なのも富、樂天的に世に處するこれも富、斯ういふ風に考へて見れば我輩も最も富んで居るものだと思ふ、諸君我々は理想に於て富、進歩といふ点に於て富んで居る唯の金々といふことばかりに煩つて居ると尊ひ所の農業を捨て終ら事になるのであります、斯ういふ考へを二宮翁は農に就て持てをられされた、彼の不世出の

り又鴉か一番だといぬ人もある如く、其人々の流義によつて甲の人か詰りないといふ事も乙の人か面白いといふ乙の人か面白いといふ事も丙の人か厭だといふやうなもれだと言ふの外はない、斯う答へて置きませたか親か色々な詰らぬ事をした結果不良の少年か出來た夫れを感化して親に返す社會に返すを則ち、世の中に人の棄てざるなき物を拾ひ集めて民に與えん、二宮先生のこの心は随つて居るのであります、さて農業の國家の土台である大切なものであることは、單に衣食住を供給するばかりではなくて、若しこれを棄て置たならば社會國家か非常に不潔となるものと、清淨なものにするといふことは詰りぬ事であるかないか考へれば能く解ることでありませぬ、彼を農民は人糞を扱うから汚ないものであると言ふか、夫れなら我々は何うまで大きく成たか、母親か幾年もの間我々の尿尿を汚ないと思はずに始末してくれた陰ではなぬか、若し人糞を扱ふものを詰らぬものとすれば我々の母親も又詰らぬものと言はねばならぬ、母親を詰らぬもの卑しいものだと言ふ者か何所にある、そこで國家社會に於て人糞は農民が始末するのは詰り我々の母親か我々の尿尿を始末してくれらると同窓小鳥の如くでないか

二宮先生は何をやつてをつた、農業をやつてをられた何ても天下の事を農業から割り出されたれてある、二宮先生の最も憂へられたの天下に荒地か多い事てつた、これと徳川の末世には人々か奮つた結果荒地か多くあつたのである、野州櫻町三ヶ村これを開拓するに、二宮翁は何うしたか一番初めに何をやつたかといふに、越後へ行て人を連れて來らせた越後は人の多い所であるから出稼人か連れて來た、人間か少なければ開墾すること出來ぬ、當時の人は何う言ぬてをつたかといふに、佐藤信淵翁が著書に見ても、人口稀薄な部落は何うして人間を殖すかといふて居る、摸範村として私の最も推す所の宮城縣名取郡の生出村、こゝへ行くといふ平均九人づゝ居る日本平均をて一戸五人しかあひ、夫れか一戸平均九人實に盛んな村だ、國に於ても世界中で一番盛んな國はといへば人口の殖る國である、人口の殖るやうな國てなくて逆も駄目だ、所か斯ういふ論がある、動物と何ても下等なものを殖ると、友達か貴様は子供か幾人あるといふ、私は十人ある夫れだからいぬてはなぬか、子供の澤山あるといふのは、夫れは母の腹か強いから殖るのであつて腹か強ければ國か盛んになると同じ事だといふと、夫

れは下等だからだと向うも中々理窟をいふ、人間は普通一つだか犬や猫は五つも七つも十うも産むと蛙などは千も産むが千三つとて其中で三つだけ育つのだか何うだなどいひますか、私は何うしても殖るものは強いといふものであつて決して下等じやないと思ふ、強いのれは何うしても殖ゆるし弱いものは段々滅つて行くものである、仮令バ北海道の「アイヌ」は政府か如何に保護してやつても段々滅るとか、夫れから亞米利加に「インデアン」といふ土人がある、これも又米國政府か色々保護を加へてをるか年々滅つて行く、爪哇の土人これも矢張り滅つて終う、夫れから文明國てと佛蘭西か滅る、人間か段々滅るといふ事になると終には絶て終う事になるに相違ない、これと文明の生存競争て然うなるのである、英吉利、獨逸、日本皆殖る、これは下等だからとやあゝ國運の隆盛といふものであつます、二宮翁か櫻町へ行かれたこの櫻町三ヶ村元は四百五十軒もあつたものか百七八十戸に成つて終つてゐた、そして第一人を殖さなくてといふので越後から若い屈強な者を連れて来て、十六年の間に今ていふ摸範村のやうなものか出来上つて終つた、先づ第一に二宮先生は人口を増殖すること骨を折られたのである

農業の改良

農村の發達

るて第二番には、世の中に人の棄てざるなき物を拾ひ集めて民に與へん、この心を以て世の中に荒地か多し棄地れ多いといふことを頻りに歎いてをられた、そして二宮先生は口癖に、開發々々といはれた、先生の御供をして歩くと始終口癖にいつても開發々々、普通の人なら川なぞ飛び越すに「ドッコイシヨ」と飛び越すか、先生は川を飛越す時でも開發々々て越された寝言にまでも開發々々と言はれておつた、夫れは疲弊した國が盛んにするは荒地の開發をしなければならぬといふ事か始終頭にあるからである、こんな所なんだといふ處で棄てある所のものを大に拾はれた、二宮先生の荒地の處分といふことは當時の社會政策として當を得たものであります、報徳の第一義とて世の中に棄てあるものを拾ひ上げて、然うして天に捧げるものである。

昨日か申した事か大抵な解りになつたこと、存する最う少しいふて置きたいおとは、農業の進歩と農村の發達と違ふ事である

れは大變に違ひます、農村といふ事の發達を圖るに於て農業の改良をしたならば好からうかといふに決して然うてはない、一番近い例を引くと一昨年此所にをられる、飯嶋先生(飯嶋幾太郎氏のこと)か大晦日に來て明春小縣で報徳社か出来るから來てくれと言はれたか、私はとどやあまただけて善いてとないかと言ふと、何うしても來て貰へねばならぬ小縣郡は製種養蠶も盛んな所であるか、何の村も負債か多いので二宮先生の分度をして貰ひたいといふ譯で、昨年出かけて行て金のある貧乏人の顔を見に行きました、所か養蠶か盛んで金は澤山取れる、けれども村々々々曖昧茶屋のやうなものか出来てゐてそれ／＼金を使はせるやうな出来てをる、一步進んだのは碓氷と越して東京へ出て行く、相場やる、村か大變貧乏に成て終つて、相當な善い顔はしてをるか借金をしてをる、斯ういふ風な所は他にも澤山あるだらうと思ふ、一ヶ月前に丹波の綾部へ行きまた、こゝは何鹿郡でも立派な所であるか、一人て五百圓六百圓といふ借金をしてをる者か澤山あるを原因を調べて見ると養蠶の盛んを爲に非常に奢したのてある事か解れた、これは養蠶一つの例て有りまするか農業技術の進歩をするに金か取れる、金か取

れると自然奢つて來る、然ういふ風ならば寧ろ金儲からぬ時の方が善い、儉約をして貧しく暮らしてても借金かないだけ此の方が餘程ましだ、耕地整理して米か餘計取れても又は果實なぞか澤山取れるにしても農村の改良をしなければ前のやうな結果になること、思ふ、それで二宮先生は餘ッ程豪い人だと思ふ、開發々々といふてをられたかそれは荒地の開發のみならず又心田の開發々々抜いはれてをつた、經濟と道徳といふものか同一歩調を取らねばならぬ、荒地の開發、心田の開發といはれた之れか豪い所である、晝の間と農業の盡力をされて夜よなるに村れ者を集めて報徳の話を書かれた、福住正兄翁か六年附てをつて其大部分を書いたもの、美濃紙に書き取たそれか今日二宮翁夜話と成て出版されておる、其の夜話の一節(第五十九)に斯ういふことかある(七十七頁)

弘化元年八月其節より日光神領荒地起返し方申付る見込の趣取調べ仕法書差出すべしと翁に命せらる、予か兄此の予といふのは福住正兄翁の事か大澤勇助出府し恐悦を翁に申す、翁曰く我か本願は人々の心の田の荒蕪を開拓して天授の善種仁義禮智を培養して善種を收穫し、又蒔き返して國家に善種

報徳と其四大要綱、おれは講了することは出来まいと思ひますが、明日午前午後と講演して結ばうと思ひますか御當地では飯島サン又福澤サンなりの御盡力で報徳會が起つて居ると共に又報徳の書類も多く輸入することは信州が第一でありまするが故に相當の御研究が出来て居る事と思ふ、そこで私の信考て居りまする留岡式の報徳流とも言ふのを思ふ存分演へやうと思ひます、報徳の道は直ち實行するといふ事に重きを置くものでありますれば、善いといふ事は、諸君明朝からして御實行を願ひたい、私は實行せぬ人には話しを致しませぬ、私の本職は報徳の話をするのでなく不良少年の感化で家庭學校長でありまするが、時間内容すだけ内務省へ出て地方の事を調査し且出張して居ります、故に話すとが悉く責任と持て居る、諸君も又責任ある者の説は御實行下さらねばなりません、

今日我國は日清、北清、日露等未曾有の大戦争致して大勝を博しました結果、世界八大強國の一にヘーグに於て敷へ上げられました、敷へ上げられたは善いが實力は甚だ覺束ない、故に今日お互に善い事を聽て實行するとせぬとは國家の安危に關するといふても宜しき昨日も奉讀になりましたる、戊申詔書、畏れ多くも

十六
 れが出る迄には餘程、叡慮を腦まさせ給ひたる事と畏れ多き事ながら拜察し奉るのであります、十幾年來私が説き來つた報徳の趣旨と、戊申詔書の御趣意とは更に違ふことないと思ふ、則ち説く人も聽く人も責任ある事になります。

此報徳と四大要綱、これは約四時間かゝりますから明日も必らず御出で下されたい、報徳、二宮先生のこと佐久の方で十ヶ村の者が疲弊して二宮先生に願つたといふ其書付を見せて貰ひましたが、其書付は報徳様と書てありませぬ、斯る例は此他に澤山ありませぬ事で報徳様で通つたものである、昔し君父の仇は俱に天を戴かずといふおとががあるが、こまは仇討汝何所へ迄も仕遂げて主君や親を殺されて俱に天を戴くは男子の面目でないといふやうなことで、義士とか孝子とか色々仇討がある、徳川時代では大切な道徳の一つであつたが明治の今日では、刑法により仇討も矢張り殺人犯で謀殺とか故殺とかに問とせらるることに取つて居るけれども、徳川時代では大切な道徳の一つであつた、夫れて二宮先生は天明七年に相州に生れられた此時は、白川樂翁侯が老中とあられた時で、徳川幕府も先づ約其三

分の二を過經した時代であるが、二宮先生は曰く、仇を報ゆるといふことは忘れぬが徳に報ゆることは忘れ居る、と言はれて居る勿論宗教的には言ふたかも知れぬが、道徳的に社會的に經濟的に、恩に報ゆるといふ事我説いた者はない、徳は何所迄も報いねばならぬと言はれたのと二宮先生ばかりだ、一言でいへば本を忘るゝな、或は天地の太恩は或物を返すといふこと返禮するといふことになる、二宮先生の語を借して言へば、報徳は百行の長よまて萬善の基である、そこで本に返す天地の大本に返す、これが報徳の道でありませぬ、天地の大本、これと何であるか何々天地の大本であるかと考へて見ると、二宮先生の報徳訓といふものがあつる、報徳訓といふものは報徳の道をついたもので、仮令ば牛乳に於るコンデンスマイルクのやうなものだが、此十二よりなる句の中は廣大無邊な報徳の道をついてあります、

父母の根元は天地の命令に在り
 身體の根元は父母の生育に在り
 子孫の相續は夫婦の丹精に在り
 父母の富貴は祖先の勤功に在り
 吾身は富貴は父母の積善に在り

十七
 子孫の富貴は自己の勞に在り
 身體の長養は衣食住の三に在り
 衣食住は田畑山林に在り
 田畑山林は人民の勤耕に在り
 今年の衣食は昨年の産業に在り
 來年の衣食は今年の艱難に在り
 年々歳々報徳を忘る可らず
 父母の根元は天地の命令に在り、つまり我々の先祖を尋ねれば天祖となる、これ汝西洋でいへばアダム、エブであるが、其前はといへば天地の命令であるといはねばならぬ、天地の命令、これは支那人の文である故に二宮先生はこれを歌に詠で詠る

古しへは此世も人もなかりけり
 高天原に神在しつゝ

誠によく説明されて居る、夫れから夫婦が出来る、兄弟が出来る、田畑山林人間萬事萬端が出来て来る、そこで天地の恵みによつて鞠育されたもののであるから年々歳々報徳を忘るべからずと結んで居る、私が段々考へて見るに報恩報徳といふ思想は實に美しくいふ思想であつて、これを通常にいふ有り難いといふことにならぬ、此の有難いといふ思想が今日では大衰へかけ

て居ると思ふ、私は二三年前に日頃知り合の金原明善翁に、金原翁は字が旨いので、難有と一つ書てくれと頼んだら、そりや面白くないではないかと言ふたが、これ難有といふ二字が善いのだといふたれで、難有と書いて明善と落款を置てくれましたが、私は夫れを額にして六疊の間へかけて置ました、それから私は六疊の間には紐育のやうな盛んな所の畫の額がある、こちらの方にと致良知といふ藤樹先生の額がかけてある、向うの方にブラス大將の書に其肖像がある、又一方には蜀山人の

達摩さんちんちん
向かんせ世の中は
月雪花に酒と三味線

といふのがあつて、中には難有ナンユウこりや一体何だなど、聞く者があつて大笑ひ致した事もあつたか私の人生観はつまじり難有といふことである、詰り今回信州へ来るこれも私の説を聴きたいといふので招いてくれる是も有り難い事であるといふに外ならんのであつて、人間之何うなても此の觀念から仕事をせねばなりませぬ、私と有り難いといふ思想が徳川時代より衰へはせぬかと思ふ、私親父の代などには、有り難いとかが勿体ないといふ事を大言ふたやうに思

ふが、今では人に物を貰うといふやうな時外には人が餘り言はぬやうに思ふ、宗教道徳の意味に於て有り難や勿体ないといふ人が少ない、仮令ば食が一粒も不れて居る、昔しと有り難や勿体ないやと拾つたものが今では然らぬことを聞かぬ、詰りこの心の失せるのは人間が輕薄になりはせぬかと思ふ、第一に日本人の顔の形が徳川時代より變つて來たやうに思はれる私の職務として研究して居るれば泥棒を治すといふことに成て居る、グリミノローヂー、これは犯罪に關すること研究する學問であるが、これと幾つにも分派があつて或は顔だけを研究するとか手だけを研究するとか色々あつたが、私とフデオグノミー、則ち顔だけのことを研究したことがあつた、夫れで私はヒョツと人の顔を見ると此人は何うか知らんと思ふやうになる、そこで徳川時代からかけて生きて居る人の顔、これを大言死んで終つたから繪本などでよく見て、夫れから今の人に比べて見ると徳川時代の人は概して顔が丸く出來て居る、所が明治式の顔と多く三角に出來て居るが、此の丸いといふ方と圓満福徳と云ふ事を意味して居る則ち有り難いといふ顔、三角の方と則ち危険な顔、概して危険な顔である只危険では解らぬが今

は流行語といへば權利義務の顔である、權利義務、これは西洋から來たことで結構であるが、三角の顔は大抵權利ばかりの顔だ、私は一ヶ月程關西を廻つて居る中に親裁裁判所へ三年も願ひつけて居るといふ新聞を見させたが、これは則ち義務よりは權利の方を主張する方である、能く注意して御覽をさい私と世の中が段々然といふ風になりはせぬかと思ふ、報徳といふ考へが無く取つた爲に不良少年が殖て來たのと有り難やといふ觀念が無いからであつた、私が斯く出かけて居る私は子供が十人ある夫れは生徒が三十六人ある、私は車代や何かで節約して二三圓の物を土産として買つて行つてやりますが、私の子供はこれはおトツさんの御土産だといふて只嬉しがつて有り難うといふて居ります、然るに不良少年の方は各自に其の大小や多少を比べ合て誰夫れのは大きい自分のは小さいとかいふやうな事を言ふて騒いで居るばかりで、少しも有り難いといふ觀念がない、酷いヤツはこりや何うも校長は不公平だなど怒鳴つて私の所へ迄持ち出すやうなものもありますが、私は家庭學校を建つて今年で十一年漸く解けた此の不良少年の父母が有り難いといふ觀念がないよりして、何をやつても有り難いといふことを

言つてぬやうな子供が出來たのであつた、瑞西とベストラツチといふ人がある、この人と初等教育に有名な人でありやするが、ラブエンドグラツチといふことかある、これは慈愛といふことと感謝といふことと親か慈愛を以て子供を育てる、子供は又夫れを感謝する則ちこれ有り難いといふ觀念かなければならぬ、所が不良少年や不良青年には此の觀念が少しも無い、夫れを世間では友達か悪いか何と云ふか、其根本は親にその有り難いといふ觀念がないからであつた、夫れで二宮先生の報徳といふことに思ひ合して見ると能く解る、所で今日では段々此の觀念が薄らぎて行くやうに思はれる、報徳といふことは天地の大本に返す夫れのみでなく主君の恩親の恩、其以上に於て天地の大本に返す夫れから段々割り出たものである、私は解り易くこれ天地の命令に在りといふことを天地の恩といひたいのであつた、殊に農業は天地の恩を餘分に受けて居る、所が人或はうんな漠然たることでは困るといふ人がある、仮令は一反の上田で米三石を取るとする、一石十五圓と云つて三石が四十五圓になる、夫れを取るには小作料とか肥料とか要る、其残りも誰が取るこれ皆作り人が取つて終う、これを誰の爲に

二、勤 勞

二十六

今日は昨日の續きを御話し致します。そこで本日の勤勞、報徳の勤勞に就て演べるのであります。二宮翁は勤勞を以て主とすると云へて居る、私と勤勞といふことに少あからぬ趣味を持って居ります、勤勞の社會一般の上より又少あからぬ影響を持て居るが、只働かねばならぬだけでは何等の趣味も教訓もありませぬ、社會一般に何ういふ影響を及ぼすものであるか、二宮翁とこれに向つて報徳の道を守り社會國家に向つて獨立して行くには働らかねばならぬ、報徳とは或物を天に向つてか人に向つてかこれを返し、其後を子孫に向つて或物返すといふ事々報徳であると説かれて居る或物を返すといふには無い物を返す事は出来ぬ、兎にも角にも名々の報徳するには名々貯へて持て居らねばならぬといふ事は明らかである、其持て居る物は何だといふに即ち勤勞であります、勤勞でなくして得た物を人よやるといふのは好くない事だ、人に物をやる権利といふものは已か働いて得たものでなくては不可ぬ飯食ば親か蓄めて置たものを遣るのでは面白くない、それは自分か遣るのでなく詰り親か遣るものである、親

から貰つたものを遣るの之則ち報徳する権利のないものだ、故に何か自分の得たるものかなければならぬ事になる、茲に於てか何うしても勤勞といふ必要か起つて来る、働くといふ事、これは私は労働といふことに解さない、勤勞は報徳の主とする所である、之れは只手足を動かして働らねばかりの事である、好い事を考へ出さねば勤勞、本夜讀んで好い事を見出すもの勤勞、人間の腦をつかう事之をも勤勞、其の廣き意味の勤勞は報徳に於て缺くべからざるものと二宮先生は云はせて居ります、經濟上道徳上社會上、働らぬといふ事を取て終へば人間か無くなつて終う、或地理學者か地球は何てあるといふと、人間の勤勞を舞台であるといふて居る、役者か演劇をする時に躍る舞台やうなもれて居る、而かも單り人間ばかりでなく禽獸蟲魚草木より高等の人間まで皆勤勞するてある、草木か大きくなる是れ皆勤勞の結果だ、芽を出す花を開く實を結ぶ、今度之葉か落ると木乃成分か根へかくれる之れは人間か寝て休むやうなもので來年の文度をして居るのだ、勤勞といふものを取れば社會に於る森羅萬象皆無くなつて終うと見て差支ない、人間社會でも殊に農業部落で働らぬといふことか最も必要である、凡

ての農産物を取る之れは只働らぬといふれば取れる、テ農業部落の人に向つて二宮先生か勤勞を説かれたのと殊更の意味かあります、私は常にいふ、平時に於る兵隊は農民である、何故農民か平時に兵隊であるかといふに、平素不斷に天地宇宙と戦ふをして居るのは農民であるからである、冬の寒さ、夏の暑さも厭はずに働らく之れか則ち戦争かやうなものだ、田地畑を耕する、これは弱虫では出来ない事である、日露戦争で日本の兵士は意氣か強といふたか、之れは僅かな間だから出来たであらうか、長い間行つたら沮喪して来るに違ひない、現に媾和談判開始の頃には大々意氣か衰へて來たといふので、講和訂結か途にも餘程此邊の勤勞といふものは死ぬまで行らねばならませぬ、故に農業程戦争の意味を持って居るものはあると思ふ、何うしても目か開いて居るば働かねばならぬ、二宮翁自分は水呑百姓、腕一つで天地と戦ひ二十五才迄に祖先の家を大抵恢復して終つた、田地畑が人手に渡つて居たのを取り返し、家も又毀れたのを改築されましたのは之れ皆先生の勤勞である、如何なる人物を歴史の中から見付け出しても、二宮先生程働ら

れた人はあるまいと思ふ、其幼稚の時は勿論、櫻町へ行かれてから死に至る迄非常に働られたものだ、殊に先生は病氣に罹られて日光へ行かれたのであるか、日光乃御神領地は八十九ヶ村ある、それ八十九ヶ村を毎日怠らず巡廻される、それを弟子が見兼ねて、先生は御普請役であるから駕籠に召されてはと勧めたか、先生は中々諾かれぬ、草鞋穿きでもつて疲れると石に腰をかけては休みとして、其病體と老體とを以て八十九ヶ村を巡廻して調査をされた、二宮先生の考へで人間の幸福といふものは何から得られるといへば、働らくといふことである、勤勞は幸福の源である、斯う云われて居る、元來幸福と云ふものは天から降つて來るものでもなく、地から湧いて出るものでもなく、只人間か働らきから來るものである、先生の實に子に臥し實に起きるとある子といへば今の十二時實は四時、四時間すら寝むれあかつたのでありませぬ、宇都宮に渡邊梅子といふ婦人かあります、今年八十一位になりましやうか此婦人は二宮先生に仕へて居た者であるか、私は訪ねて行つて二宮先生の事を聞いて見ませぬ、二宮先生は大抵今の四時頃に起きられて行燈の火をかき立て、此當時れふみサンといふ娘か一所に居られた

二十七

か、此の娘サンお書類を讀ませては自分で直して居られる、其中に夜か明けると村々の巡廻に出かける、斯ういう風は勤勞されたものだ、夜之四時間すら寝ないといふやうな事は普通の人が出来る事でない、二宮先生の身体といふのも又普通でなかつたことか解る、夫を程二宮先生は働らかれた、報徳夜話でも勤勞といふおとは少からぬ教訓ありませう、

天地の恵み積み置、無盡蔵
鐵で掘り出せ鎌で刈取れ

此は歌を見ても其眞意はよく解ることであります、又道徳經濟に眼をつけて居るものか働らかすして何か富を作るものだ、今日の經濟學上でも資本、勞力、土地とこの三つが三大要素である、これも今も昔しも少くも變りはない、一体世の中の文明進歩は人物か勤勞をた結果である、社會の文明が何うだとか斯うだとかいふがこれ皆人間の働らいた結果で、人間が働らかすして何うして文明になるものか、所が我國には惡風がある、それは働らく事を恥かしいといふ風がある、私が嘗て内務省に這入つた時に、属官ばかり働らいて長官程働らかぬ、近頃之大變に變つて來たが西洋人の考へと餘程違つて來た、昔しは土百姓とか素町人とか、

働らいて、武士は喰はねど高揚枝で働らかぬといふ封建制度は餘獎が未だ今日に残つて居つて、働らかぬ人は豪い者で働らく人間は詰らぬ者のやうに思ふて居ると、一つは儒教の欠点であると思ふ、王何ぞ必らずしも利夜説んや只仁義のれみといふ筆法で、經濟の事を餘り説かなかつた爲に、其餘獎として働らく者は卑しい者だと思ふやうになつたのである、それが段々明治政府に成ても働らくヤツは属官で上官は何んもしない、働らかすに何んにもしない者が豪いと斯ういふ風に成つ居る、數年前に特に日本の社會狀態を研究に來た西洋人が歸國してから、新聞に出した其一節に日本の紳士は恰かも病人の如きと書いてある、夫れを讀んで見ると紳士が宿屋へ車に乗つて行く、スルと先づ車夫が靴を脱がせる、風呂敷包みとか靴とかいふものは下女が持て行く、夫れから室へ行くと外套を脱かえて貰う、洋服も脱がして貰つて浴衣も着せて貰つて風呂場へ連れて行かれる、夫れから背中を流させてくれるなど、外人の目から見ると丸で病人扱ひである、恰かも病院に入院して居る患者が看護婦に取扱はれると同じ事だ、只夫れでも飯だけは自分で喰つて居たと書いてありまするが、之れは一寸奇警な觀察ではあるが

實際その通り病人扱ひにされて得意がつて居るに相違ありませぬ、之れは詰り働らける者は卑い者で下女男に限るといふやうに思ふからである、米國で有名なアブラハム、リンコルン、之れが今年丁度百年忌に當るといふので米國では其準備をして居るか、此人と非常に米國人の崇拜する人である、日本でいふ二宮先生のやうな人である、此のリンコルンは非常に刻苦して大統領にまで成た人であるが、亞米利加では自分の家の下女男にでも靴を磨かせるといふ事とない、歐羅巴で之宿屋などで磨いてくれる、そのかはり朝立つ時幾らかやらなければならぬ、亞米利加では凡て自分で磨かなければならぬ事になつて居る、リンコルンが大統領に成て巡閱の際或宿屋へ泊つた、所が宿屋の主人が是非一度大統領の靴を磨かしてと頼む、而かも執拗く磨きたいと頼む、此時リンコルン曰く、大統領に成ても之れは私の靴だ、私に靴が私に磨くに何の見でもない事があるものかと、終ひ自分で磨いて穿きたと、之れは米國人の自慢話にする事で私があちらに居る時に、自慢に話されたことであります、又ボストンの都を持って居るアノノスト、此所には有名な農科大學がある日本で此の大學を卒業したのは内村鑑三、

津田二郎などいふ人達であるが、私が嘗てその寄宿舎を訪ねて見たら、靴を入れる箱の中に靴を直す道具が一パイ這入つて居る、夫れから顔を洗ふ所へ行て見ると象皮が漬けてある、こりや餘り酷いヒヤなヒヤか幾ら何でも顔を洗ふもの、中へ象皮を漬けて置くとは、何ういふ譯かと聞て見ると此學校に靴を直して貰つて居る生徒がある、放課後になると一生懸命に働らいて夫れで學費を補ひ且つ母親に仕送りをして居る、寄宿舎の中でゴツ／＼音を立てて靴を直して居る之れも豪い、又直ぐ傍／＼ゴツ／＼やらせて居る生徒も豪いものヒヤ／＼ませぬか、モウ一つは今岡山の高等學校に居る廣津友信といふ友人がある、ハーバート大學之れは恐らく世界一といつても好い位な大學であるが、この總長は大統領と肩を並べる位な人だ、此の學校に學んで居た頃に向うから労働者が、手に錢を一パイ掴んでヤツて來る、それが廣津君に行き逢ふと挨拶をするから誰だと聞て見ると、それは矢張り此大學の生徒であるが土方と成て労働者として學費を繋いで居るといふたが、獨立自營を基礎として労働を恥かしいと思はぬ米人の氣風にと驚きました、斯ういふ人達と日本の病人扱ひの紳士と比べると實に雲泥の差がある

ます、二宮翁の勤勞といふことは西洋のこの風と相一致して居ると思ふ、實に二宮翁の卓見には驚かざるを得ないのである、天保七年の大饑饉の時に今でいふ茨城縣の眞壁郡の青木村から、無利足の金を借りたといふて六七八人櫻町の陣屋へやつて來た、由來報徳金といふて無利足で貸付ることになつて居ります、そこで先生と直ぐ貸したかといふと非常な叱り付けられた、貴様達のやうに働らかずに居て困るといふのは天の配劑尤も妙である、是れてこそ天のあることを知らしむるに足ると云はれた、六七人の者は何うか何分にも頻りに願うと先生は、二宮流に唐鍬を一挺づつやられて、天地も始終活動きて居る天地が活動し居ればこそ我々が安穩に居らざる、働らさへすれば困るといふことはある、此鍬のなくなる迄一生懸命働らけ、貴様達の家でも年寄や子供がござらう、然ういふものは鍬持つことも出來まいから木の根取るとか、土を振ふ位なことは出來やうといはれて唐鍬をくれられた、其鍬は今も残つて居ります嘗て二宮翁五十年紀念會の時東京へ出て來ました、二宮先生の研究哲學を見ると非常に面白い、二宮先生は自分が一生懸命にやつて然うして人に説てやらせる、よく世の中には口で

は立派にいふ人はあるが實際に行なふ人は少ないか、二宮翁は其度を越して犠牲献身的に働らかれた、朝は四時に起き夜は夜の更る迄、粗末な物を喰て働かされたといふものは則ち之れを犠牲勞働といはなければなりません、私は農業に方ではなく社會事業慈善事業此れ方で働らいて居ります、私は人間が病む、病むと直ぐ醫者を藥だといふて騒ぎまするけれども、勤勞は最上の衛生なりと云ふ語を私は作つて置きます、病氣は最もものは働らかなぬ人てゐる能く働らいて居る人おの病氣が這入て來ない、病氣の這入る隙間が有るべからず這入つて來るので、働らくといふことは非常な力の有るもので病魔も這入る餘暇がない、働らくのか最上の衛生であります、私は四十以後よりましてから飯を喰ふ事と寝るといふ事が非常に樂い、飯を喰ふの樂しむといふたら卑しいと言はれるかも知れぬが、私は飯を喰ふといふ事が好いのみならず非常に樂しく思ふ、飯を喰ふ事が樂しみて取いやうな人は何にもならぬ人だと思ふ、飯と見て大敵に向ふやうに厭てく堪らぬやうな事になるべきものでない、能く世間に調茶するに面倒で困るといふ細君があるか、私共は苟くも人間の喰ふべき食物あらば何でも喰ふ、何んなもの

も人間の喰ふべきものならば何んでも喰べます、眞逆に石や金は喰べられもせぬが、こちらへ參つて虫を喰つて見るといふ譯で虫を御馳走になつて来た、又私は基督信者でありますが飯を喰ふ前に必ず感謝します、禱りをするに之感謝は心で實際に起らなければ出來ぬ事でありませ、夫れから夜を寝ることも非常に樂しい足を伸して誰憚かる所を寝る何たら樂しいことである、蒲團の硬い軟かいは問ふ所でない一日充分に働らいて足を伸してグツツと寝る實に氣持が善い、所が世間では金が幾らあつても不眠症だとか又は神經衰弱だとかいふ事になつて、人のいびきさへも邪魔とする人かあつて醫者は藥やモルヒネの爲に眠るといふ様な事に成るか、適當に働らいて健康でさへあれば何んな物でも口に旨く、又安々と眠るとか出來る實に勤勞は最上の衛生であります、夫れから病氣といふものも健康な人には這入る餘地がないといふ事は、私昨年新潟へ行きまたた時に風邪でも引いたものか、四十何度熱が往來して來ました話をすると汗かたら〜と出る四十何度といふ熱は随分高い熱であります、一つこいつはグンと一生懸命に演説して見やうと思つて掃はすやりましたか、其の時に斯ういふ話しが

した、一体バチルスといふものがあるといふ病原には相違ないか、その病原は人間か飲んでも差支ないものである、充分健康な人でゐたならば白血球か之れを退治して終るものだから、世間で騒ぐ程恐るべきものでないと思ふ、斯ういふ話しが致しました、夫れが新聞に出て四十日前に京都府兵庫縣三重縣へ參りましたか、或校長が、あなたは嘗て新潟でバチルスと飲んで、イ、ものだと言ひあされたか、夫れは傳染病豫防上面白いなと思ふと言ひましたから、私は今でも然うだ健康でさへあれば決して恐るべきものでないと思ひ居ると言ふて、實は歸つてから學問上の事を知りませぬので多少不安な心持が致しまするので、東京で肺病治療で有名な高田研安先生に此話しをして聞いて見ると、夫れが恰かも學問上よ叶つて居るといふ事である、夫れは昨年だか一昨年だか獨逸に然ういふ議論が起つた所が、獨逸の「コッポ」氏は何うしても飲んで不可ぬと言ふと、コッポの向ふを張る先生は衛生會に於てこれならばといふ肺病のバチルスをコップに一杯飲んで見せた、大勢並んで居る衛生會員の前で速かに飲んで見せた、所が此博士は非常に丈夫な人だから日暮に

少し下痢を催したばかり何ともなかつた、然し弱い人ならバチルスの方が勝つて終つて病氣にあるか、健康の人は血球が強いからバチルスか這入陸て来ると直ぐ喰つて終つて終つて何ともないのてゐる、この説を高田先生が説いてくれたか詰り私乃立てた説が、だと大に安心して、確信することになりました、私共は肺病でゐるうが何うであらうか構はぬ、見舞に行つてやつてドン／＼飲食する丈夫でさへあれば更に構つたものぢやない、と、強て強てバチルスを飲めと言ふ譯では有りませぬ、私近來年と共に非常に丈夫になつて来ましたが、八十位になつた、何んなに丈夫なるでゐらうかと思つて居る、私家内は能く言ふ、朝は五時に起きて晩は十一時に寝るがよ、夫れで私之著述撰する何をする充分働らぬて然うして寝る、所が或人がいふことに餘り働らき過ると病氣になるといふたか私は未だ働らき過ぎて病氣になつた人を見たことかな、之きは滅多にない事であらうと思ふ、故にそんな心配はせずに働らくか善い、大概は遊び過ぎや喰ひ過ぎて寝る人ばかりである、これ大切取身体を一週間も一と月も長く、五年も六年も寝るやうな人は、國家に對して不忠不孝であると思ふ、身体髮膚これ皆父母に

享く敢て毀傷を齎るこれを孝の始めとすとある、孝の始めか出来ないうやうで何うして孝の終りをする事か出来るものか、昨年播州の高砂の脇に伊藤長次郎といふ豪農かゝるか多額納税者の貴族院議員とあつて居る、こゝへ井上參事官を、一所に尋ねて行て、小作人奨勵法なき聞きたまはたか今の長次郎といふ人よりは親の長次郎、則ち先代の方が中々豪い人であつた、或小作人か此の先代の長次郎に向つて、あなたは終つて一度風邪を引いたといふ事を聞いた事とありませぬか何ういふ譯でありますかと聞くと、俺はナア忙がし働らいてるから風邪を引く暇かないれサと言はせたと語らせたが、實際然うだ暇かあるから病み思ひもする、流れる水に腐敗はない澱む所の池や堀の水は濁り腐れるか如く、人間も暇かあると色々な病氣を起したり犯罪をする事になる、夏は悪い事をする者が少なくて風俗罪の如きは冬最も多い、而かも山國に殊に多い、山國は一體正直だ、西洋でもスコットランドとかスヰツルランドとか皆正直だ、こゝを何れも私生兒が多い、私生兒を澤山産む、山國は何れも暇だから別段悪い心からするでもないか、娛樂的にする所から私生兒か澤山出来る、これは社會學上私生兒學といふ

一つの端緒が出る、之れは正直だから私生兒が多く出るといふ事があるが、閑暇に乗じて悪魔が這入つて来て私生兒が出来るのである、正直だから出来るのではなく詰り悪魔に魅せられる結果だ、故に副業兼與へて暇をなくしたらばよからうといふ事は、社會政策上は論であります、又心理學上人間の働らくといふ事、二つある、夫れは

金を得らる、
名譽を得らる、

此の二つの欲求に依つて働らくといふ事があるが、只金が得られて名譽が得られ、バよいか、佛蘭西でグロートミといふ人が英國人の心理といふ書物を著した、私此の本を面白く讀みまたか其中に斯ういふ事か書いてある、英國人は勿論金も名譽も欲しいに相違ないか、働ら羨其もを好んでするといふ癖がある、佛蘭西人や獨逸人と唯々金を得んが爲、名譽を得んが爲にのみ働らくのであるか、單り英國人のみは樂まみてゐるといふ考へより働らくといふ事、心理的分拆して書いてある、我國ても金や名譽が得られなかつたらば働らかぬといふのは十中八九、然うだらうと思ふ、人間は精神道徳と掌る所の教育家でも月給の高

い所へドシ／＼轉じて行くではないが、私は金の高ては仕事せぬと大に主張して居る者であります、金を望んでする人は金以上の仕事をせぬ者である、私某縣へ行て夏の暑い頃に泊つた事がある、詰らない扮装で汚ない靴を以て行たものだから、宿屋の亭主は私の頭の先きから足の先き迄見て容易に上れといふ事を言わない、漸く上陸して座敷へ通つて見ると薄暗い微臭いやうな室で先づ此宿で一番下の室らしい、私はこりや善い鹽梅だこんな事なら茶代などは氣張らんでも善いと思つては見たもの、氣持はよくない、暫らくすると其縣の事務官など訪ねて来て見て、何故こんな所へ御通し申したのだと散々叱言を言われ、私が何に構はぬと言ふものを此度は豪い善い所の一番の座敷へ連れて行つたが、これでは翌日の朝茶代を奮發しなけやならぬ事に取つた哩と私は一喜一憂交々來つたといふやうな事であつた、夫れから翌朝マア茶代だけは氣張つたが、何うも小癪に障る所から亭主を呼んで見て、前前の所の表の看板は書き方が悪い今日よ書き直せたら何うだ、旅人御宿でな旅金御宿と書き直せお前の所は人間を泊るのでない金を泊るのだと、言ふたら亭主は只赤い顔をして黙つて居りませぬが、堂々たる人

ても今日皆旅金御宿主義てやつて居る、金の高て去就したり勤勞を別にまたもするやうな事では眞面目な仕事か出来るものでもない、假令は正宗の名刀、これと月給や金で出来たものではない、一振の刀でもこれは何月何年かゝつたか解らぬ、打つて見ても氣に入らなければ折て終う、正宗と銘を打て恥かまからぬものなれば何年かゝつても構はぬ、然るに之れを金で換算して決して引き合ふやうなもてない、此他名畫でも美術品でも金で出来たものではない、氣分が乘て來て始めて出来たものて居る、今日國寶となるか天下一品とか云ふ作は金や何かで出来たものてはありませぬ、お互に何うまても本統のことをしやうと思ふなら、金や何かに目がくれるやうな事では出来るものてない、金と云ふものは報酬中の最も低いものであると私の思ふ、近頃悪い癖が流行つて講談師でも講演者でも、一週間何百圓をあげれば行かぬと云ふもれかありますけども、私の其金と云ふもの最も低い報酬であると思ふ、私と金夫れよりは何百人といふ人が集つて居るその中で其説によつて直ぐと明日より實行するといふ人があつてこそ、始めて天下國家に對して益する所があるものて之を極めて高い報酬である、僅かな金と

れと極めて低い所は報酬てあります、名利と云ふことを離れてするのてなければ人間と云ふものは本統の仕事の徹底すべきものてありませぬ、斯く考へて見れば人間の働らきは極めて尊いものである、二宮先生と働ら姿に對して何う云ふ考へと持て居られたかと云ふ二宮翁の説に
 天地人三才の徳を助くる
 とある、お互の仕事をするのて語り天地の神々と共同事業をして居るれたから一生懸命にしなければならぬ天は我々の仕事を助け我々は天の仕事が助けると云ふ工合よ、我々々々の仕事を助け居るのであります、又二宮先生の説に
 誠に禮拜せよ
 とありまするか、神様に神酒が供えたり神輿を昇ぎ出すおは本統の禮拜ではありませぬ、誠に禮拜とて天意を奉戴した天賦の徳性を擴張して以て、天地人徳を養育するにありと説かれて居る、小田原で何故報徳か振はぬと云ふから私と、君等は二宮神社と建てたのか悪い二宮先生を祭り上げて終つたから駄目だ、それよりは名々の腹の中へ二宮先生を入れて居れば善いのだと云ひました、或はチト過言かも知れませぬか實際は

そこで有ります、かう云ふ意味は於て働らいて居ると人間か欣々然とし働らいて居られる、私は二宮翁の報徳の道と勤勞を以て主とすと居るに、之れからは叶うものてあると致々汲々して居ります、働らきに就ては二つの條件がある、其一と朝起、朝起きてあります朝起きをしないで勤勞家とて言はせませぬ、人間か本統に働かうと思ふには何うしても朝早く起きなければならぬ、朝の二時間は午後の四後間にも向ひます、夜休すんで身体と恢復されて居るし氣分も爽やかになつて居るので、朝の時間の僅かでも大した仕事か出来るものであります、私の家庭學校は大抵年中五時に起きることにして居りますか、それて日の短かい時には一時間位ランプを灯さねばなりませぬ、何故然ら早々起きるかといふに、不良少年は大抵朝寝とするものて朝飯と晝飯を一所に喰う、酷いヤツは夕飯迄一所に喰うやうな事も居る、それと大概夜遊をして朝歸りをするのて居る、其父兄か晝書を寄越したのを見ても必らず朝寝夜遊びか書いてあります、朝飯と夕飯を一所に食ふやうなものでも習慣と言ふものは感心ももつて、家庭學校へ來てからは五時に必らず起きる今では競争て起きる、一人の小年か巡番で四時み起きて水を汲む

水を風呂場へ汲み込んで終うと一同皆水に漬る、冷水摩擦所やない水浴をやる、水の中に二分か三分間居てから手拭て拭く、何んな寝坊も水の中て居眠りも出来ないのて能く目を覺すものてす、そをから禮拜堂へ這入つて朝の禮拜を済して、六時から七時まで校内の掃除をしてそれから學課にかゝる事になつて居る、彼様に朝早く起きるので仕事かよく出来ます、私共旅中ても此規則を堅く守つて居ります、朝早く起きるやうてなければ本統の勤勞は出来ませぬ、世の中の人は冬の日短かいと言ふか之れは朝寝坊のことだ、私共五時に起きると冬の日中々長い、福島縣に三代村といふ之れは摸範村てありまするか、朝起きを勵行してそれで摸範村にあつたので居る、朝四時から村長か鈴を鳴らして村中起し歩行く、何年もこれを勵行して終に摸範村とてなつたので居ります、朝早く起きると空氣も清浄であるし日光にも早く當るし非常な身体の工合もよるしい、人間か萬物の靈長だといふて居るなから雀より遅く起きる、雀に飛んか起されるやうな事であるのか、日光に歡迎されるやうてと駄目だ日光をこちらから歡迎するやうてなくてはなませぬ、此の中に神佛を信心する人が幾ら居るか知りませぬか

私も宗教は違ふか神心信乃方であります、それか十時
 時分に起きて拍手を打て見た所で何うも調子か合ふぬ
 世間は何となく騒しむし日か一丈も二丈も上つてから
 では心持か變て拜める譯のものてない、朝早く起きて
 こそ神佛を拜することか出来る、私は神よ祈禱する、
 朝早く起きなければ心が清浄でない心か清浄てなけれ
 ば祈禱か出来るものでない、宗教と朝起きこれも密接
 の關係が有るものであります、私昨年本郷の古本屋で
 古本を買つたそれは三冊物で水野卓齋の書いた養生辨
 といふ本であります、その中に朝起運氣の辨とい
 るもの一節に、朝は東雲とて東に横雲の棚曳いて居る
 頃より起き出下、先づ天つ日を拜しそれから産土神
 を拜む、人この氣我受けて起きるものは病み患ひとい
 ふことなし、こゝ運氣に逢はざるものは顔青ざめて氣
 力なく病氣の絶ゆることなし、といふやうなことが書
 いてある、此本と天保七年に出来た本であります、同
 じ天保年間出来た本で南北翁といふれか書いた本に
 斯ういう事か有る、遊んで居て夜更しをするものは徒
 らに朝寝晝寝を好む事になり、晝を夜として陽を盗み
 夜を晝として陰を盗むものなりと、こんな事か書いて
 ある物を盗むのは泥棒だか陰陽にも矢ッ張泥棒があ

ると見える、私は勤勞するには必らず朝起きをするに
 限ると思ふ、歐羅巴人は朝寝をする癖かあるか日本で
 は朝起きする事に成て居るのは結構なことてあります
 最う一つの時間夜嚴重に守る事、こりや日本人は向
 きが悪いかも知れぬか歐米では實に正しい、米國には
 パクチワリーといふ語かある、これは時間道德とい
 ふことで時間を守ることは人間の道德であるといふ事
 に成て居る、日本よと未だ斯ういふ熟字が有りませぬ
 か勤勞するにば何うも時間も守らねばありませぬ
 私嘗て香川縣の高松公園で話しをされた事かありませぬ
 之れは香川縣の教育會でやるのでありませぬか、可及
 的多くの人に聞かせたいといふので劇場でやる事に
 した、私よ七時に来てくれといふたか七時が来ても八
 時か来ても始まらない、それから何故始めないのでと
 聞いて見ると二時間位待つのを高松時間といふて九時
 てなければ始まるまいといふ、それから何故九時だと
 言ひないので只忙然と待つて居る、教育會で企てた仕
 事に高松時間を採用しなくもよいてとさいかと、悪る
 口叱言を吐たおとが有りませぬか何所にも高松時間の
 やうなものが、大陽の二十四時間以外に於て困つた
 ものであります、そをなら凡て時間守らないかとい

ふも汽車よても乗る時は屹度来る、まて見ると普通時
 間を守らないのは横着よ相違ないと思ふ、汽車に乗る
 積りてあつたら凡てに時間を守らざるものだと思ひ
 ませ、私よ此の靴の中へ本をつめて置きませぬが之れは
 無駄に潰す時間を利用して讀むことよして居る、私の
 やうな忙しい身体ても時間を利用しておれば二十冊や
 三十冊の本は讀み終える事か出来ませぬ、時間を利用ま
 て行くといふことは實に大切な事てあります、米國の
 都會では閑時の利用といふことが一つの社會改良の大
 問題となつて居て、市民の餘す所の時間を如何に利用
 するかといふ事が大問題とあつてをてあります、閑時時間
 かあればこそ悪い事をするし悪い所へも行くやうな事
 か起つて来る、時間といふものを大切に守るといぬと
 とか非常に大切な事てあります、六年程前よ私が米國
 へ行つた時に以前から交通たけはして居た紐育のゼン
 クスといふ有名な人、折角紐育へ来たかには是非一
 度逢つて行きたいと思つて、宿屋から手紙をやつた所
 が午后一時に来てくれと言ふから、其時刻を計つて行
 て見ると、出て終つて不在だといふかハテ變な譯だ
 自分の方から午後一時に来てくれと言ふて置て、餘所
 へ行て終うとは有名な人にも似合はぬと思ひながら時

計を見ると一時二分だ、僅か二分でも此方が約束の時
 間より後れて居るから此方が悪いのだ、其後之段々人
 と約束があつてトウ、紐育に居る中途はずに終いま
 したか未だに残念な事だと思つて居ります、それから
 如何なる六づかしい事を談するのでも亞米利加では十
 五分よ長く居るなどいふ事になれて居る、若者十五
 分で切り上げなければ馬鹿者だ云とれて終う、所が
 日本では何うだ人の家へ行くと先づ寒暖の挨拶、これ
 は要らぬ事だ寒い時と暑く暑い時暑く天氣の好い時
 は好い悪い時は悪いに極つて居る、それから何うも用事
 のある時ばかり参りませぬとやる、用事のなれ時を
 は來なくもよいものだ、それをその不沙汰になつてい
 た譯柄を長々と説明して、それから人の噂さや悪口や
 無駄話まで時間を潰し、肝腎の用件は終い際に一寸ば
 かり言ふて行て終う、中に性急な人は無駄饒舌りか
 して居て用件は事は言はず小歸て終うやうな事かあ
 る、それなら來なくても善いのだが斯ういふやうな事
 ては逆も勤勞杯の出来るもけて有りませぬ、時間を嚴
 重よ守るといふと風俗の改良も出来ること、思ふ、金
 錢、利益、名譽といふこととあるが日本では時間とい
 ふことがない、西洋ではタイム、時は金とてこれを

誰と共に足んどあつて、是れ解き難き理なり、之れを譬るに鉢植の松養ひ足らず將に枯んとす之れを如何と問ふ時、何を枝を伐らざるかと答へたるに同じ、又問ふ此儘にてすら枯んとす何を夫れ枝を伐らん、曰く根枯れずんば木誰と共に枯らんか答へたるが如し、實に疑ひなき問答なり、夫れ日本と六十餘州の大なる鉢なり大なれども此鉢の松養ひ足らざる時は無用の枝葉を伐すかすの外に道なし、人の身代も名々一つ宛の小鉢なり暮方不足せば速かに枝葉を伐り捨つべし、此時には先祖代々の仕來りなき家風あり是は親の心を用ゐて建てたる別荘なり、これは殊に愛寵せし物品なりあといふて無用れ枝葉を伐り捨る事を知らざれば、忽ち枯れ氣つくものなり既に枯れ氣付ては枝葉を伐り去るも間に合はぬものあり、これ尤も富有者の子孫心得べき事なり。

二宮先生は分度立てなければ經濟の基礎の立たぬと言はれて居る、そこで私は分度を立てるといふ事は最も必要だと思ふ、百圓取る人が七十五圓で暮すといふやうにすれば宜しい、此の分度を立てる事が二宮先生の經濟に必要とされた所である、仮令ば百圓取る者が百二十圓費うとすれば二十圓づつ、負債する、一年に二

議論などする場合に仮し理窟よくとも譲る事よなつてトド負けて終る事もある、教育や宗教などが振となつたのは金を借りて居るからだと思ふ、金を借りてると金を貸した人は顔を真正面から見事が出來ぬやうな場合がある、金銭借ると詰り世界が狭くあつて來る而かも利子が段々殖て來て田地畑迄も取られて終る彼の養育院へ這入つて居るものでも根からの貧乏人じやない、本は皆負債から起つて來た結果に相違ないと思ふ、私は二宮先生の分度論を研究して見たか去年迄は分度論を大聲に説く事が出來なかつた、自分で借錢があるものだから一寸分度の所になると脱かしてやゝ居つた、所が此一月からは大に分度論をやることに致しました、夫れで此分度といふことは袋の中へ物を貯へるやうなもので幾ら貯へてもよいが、終い迄にと一度や二度は之れを出して公共の爲に出す事も勿論ある、或人は二宮流は消極に過ぎて仕方がないと斯ういふが、よく間違ひ易い所である、儉約と分度とは違ひます、仮令ば絹物ばかり着て美くしい物を食ても其人の身分に依てと分度に於て差支がない、身分相應でさへあれば更に差支ない私は寧ろ四千五百万人か絹物を着て旨い物を食ふやうにしたと思ふ、ビステキも喰

百四十圓といふ負債が出来ることになる、私は借錢といふ事に就ては多少の經驗があつて、私の贅澤でも何でもないか宗教とか慈善とかいふものゝ爲に借錢致しましたか、これも自分で借りたのでなく向うから貸してくれたいといふから借りたので、別段督責もせないか何うも自分の氣か責めてならない、何うか早く濟して終りたいものだと昨年の暮の十二月に持て行てやつたら、そんなになる譯さいかど向うでは言ふて居ましたか、借したものだかど終り返して終いまして、夫れで此春一つ獨立祭をやつて友達を呼うやないかと言ひまされたら、家内かマア一年待て下さいといふので延しましたか借金といふものゝ無い程氣持の好い事とありませぬ、借て我この日本の町村を見て負債をして居らぬ町村と殆んどない位で居つて、一個人も又負債をまて居て入るを量つて出るを制まては居らぬ、そこで此負債といふ事は至極便利のやうで其實便利でない此位馬鹿らしいものはあるまいと思ふ、第一この我々の貴重な頭を下げねばならぬ、此頭は無茶苦茶にさう下げべきものでない、夫れに借錢をするを利子を拂う頭を下げて利子拂つて居る、夫れと同時に人間固有の自主獨立の權利を譲り渡して終る、仮令ば

ふか宜しい、然る収入の少なきものは勿論木綿着物で粗食を居らなければならぬ只身分相應にするとか分度である、分度の中の一部分に儉約といふ事があるばかりである、二宮翁の在世時代は天明、天保の如き饑饉時代であつたから儉約を頻りと説かれたものだから之を今日世に直に應用すべきものではないと思ふ此邊と宜まを注意すべき所である随分俺れ縣で二宮流の儉約なんか説かれては困るといぬ知事もあつたか、私はそれは二宮報徳流の事を知らぬからだと言ひましたか、此分度法に於て百圓取る人が百二十圓費うやうな人は大に儉約しなればならぬ、此人か夫れでも絹物や脱ぐ事と出來ないとか今迄の交際の止めらぬとか言ふかも知れぬが何も恥かしい事があるものか、立派な洋服を着て威強つて居ても二重抵當に入れて居るとか、日歩の金を借りて居るとか蔭口を言はれる方が却つて恥かしくはないか、茲に一例がある、私の三人目の子か早稲田乃中學校に這入つて居る、私は構はず麥飯を持たせてやる、所が何うも麥飯では人の見て居る所ではと言ふ、私の經濟上のみならず手數上からも別々に炊く譯には行かぬ、若し麥飯で悪ければ喰ふなと斯う簡單に言ふ、麥飯か何だ喰いたかッたら喰ふが

四、推讓

今朝の續きを申す演べます。一昨日から引き續きまして報徳及び報徳の四大要綱に就て御話迄を致して居りましたが、至誠、勤勞、分度この三要綱迄は午前講了しました推讓の一つだけ残つて居ります。

推讓を以て用とす。

此の用の字は餘程深い意味を持て居ります。此れ用の字に詰る報徳の活用は推讓でなくてはならぬといふ事になる。推讓かあければ報徳の活用かならぬのであります。四大要綱の中で何をか大切何れか劣るといふことはありませぬか、推讓これか一番大切なことでありませぬか、推讓、これをやる爲に至誠勤勞分度を行つて行くのである。此の推讓これか又報徳の熟語になつて居ります。推讓といふやうな熟字は他の書籍中にもない、これと報徳特有の熟字であります。これか報徳に於て一番大切なことになつて居るのであります。天は大徳に報徳せんとあらば推讓をしなければならぬとせぬ、報徳社は澤山あるか其用は活動するに外ならぬのである、活動して居ない報徳社は推讓して居りませぬ、則ち活動して居らぬ報徳社は死せるか如きものであつて、眞

よま喰ひたくなかつたら喰ふなど云つて置く、夫れで終ひ麥飯でも何でも持て行て食ふ、私は世の中自然ういふ例が幾らもあつたと思ふ、二宮先生の家へやつて来て何とか仕方ありませぬといふと云ふた者があつた時に翁之着物が何枚あるかと聞かれた、すると三十六枚ありませぬがそれを無くしては餘所へ行々時に困りませぬと云ふた、翁は叱るが如く筒筒の中で飯を喰ふ者があつて堪るものかと、夫れ我賣り拂はして終つた例がある、着物を賣つたとして何が恥かし事があるものか分度と立てるといふ事が何でもない事のやうで居ります、二宮翁が殊に入笠しく云はれたれば容易に出來ない事であるからで居ります、斯ういふ風に考へて見ると餘程趣味ある事やうに思ふ、然して分度といふ事を人事百般の事に割り當て見ると頗る面白い事でありませぬ。

四大要綱の中未だ推讓といふ事が残つて居ります、此推讓を謂はぬと恰度佛作つて魂しひを入れぬと同玄事でありますから、午後は推讓の事を御話して夫れで尙ほ時間があるすれば二宮翁乃絶代の理想に就て御話する事に致せませぬ。(二十五日午前九時三十分より午後〇時二十分まで)

らざれば出來難き

と説かれて居る、之れは自讓であつて百圓取つた者が五十圓費つて五十圓蓄めて置て子孫に譲る、之を自讓であつて六ツかしいものであつて、之を行らぬ人もあつて居る人も随分あります、此位の事は知らず識らずの中に大行する事か出來るべきでも、國家の爲社會の爲に譲るといふ事之教にあらざれば出來難いと説かれた如く六ツかしい事である、是より上は譲るとは何ぞや曰く

親戚朋友の爲に譲るなり郷里の爲に譲るなり、猶ほ出來難きは國家の爲に譲るなり、此の譲りも到底我が富貴を維持せんか爲なれども眼前他に譲るか故に難きなり、家産ある者と勤めて家法を定めて推讓を行ふべし

と言はれて居る如く一番上では天下國家となる、此天下國家に對して推讓しなければならぬ、推讓といふことは二つある其二つ共行つて行くのか人間は道である所か自讓の方は自分の一身一家子や孫の爲だから損か行かぬといふのて行るか、町村の爲とか天下國家の爲とあると、之れは損やといふて一寸引き込むことになるか、二宮翁の言ふ所によれば之れも矢張り自分

面目に社會に處する根本を没却して居るものであります、澤山貯蓄して而も社會國家に譲つて行くにあると二宮翁は申されて居る、夫れ推讓といふ事は二つに説ける、其一是自讓、モ一つは他讓、此二つに説て居られる、夜話の百六頁百七頁見ると書かれてある或人問ふ推讓論未だ了解する事能はず、一石の身代の者五斗にて暮し五斗を譲り十石の者五石を暮ま五石を譲るは行ひ難かるべし如何、翁曰夫れ譲るは人道なり、今日の物を明日に譲り今年の物を來年に譲るは道を勤めざるは人にまて人よあらず、十錢取て十錢遣ひ二十錢取て二十錢遣ひ雷越しの錢を持たぬといふは、鳥獸の道にして人道にあらざ鳥獸に今日物を明日に譲り今年物を來年に譲るの道なま、人は然らず今日の物を明日に譲り今年の物を來年に譲る、其上子孫に譲り他に譲るの道は、雇人と成て給金を取り其半を遣ひ其半を向來の爲に譲り、或は田畑を買ひ家を建て蔵を建てては子孫へ譲るなり、され世間知らず一人を行ふ所則ち譲道なり、させば一石の者五斗譲るも出來難き事よはあらざるべし、如何となれば我爲の譲りなればなり此讓は教取なくして出來易き、是より上の譲りは教お依

はまて居ります、大海といふものか推譲知らず居
て百川夜呑て終つたら水が段々殖えて来て、終いには
陸地も山も皆水に漬つて終うことになりす、所て地
球は直徑一里掘つたら火かゝる此の火は如何なるもの
でも燃て終う、此れ強い火を以て下かゝり温めるので蒸
發する、その蒸發氣が雲となり其雲が雨となり雪と
なり霞となり去て又降つて来る、それが段々集つて川
となり海へ這入るをを又蒸發しては雨とする、をを
に又此空氣も十日も二十日も一寸も降らなかつたなら
乾燥に過ぎて終うか、それも此れ蒸發氣の爲に濕つて
来る事になる、それから草木これも又雨の爲に生育し
て行くこれ皆天地の推譲でありす、若しも海の推譲
といふ事かなかつたならそれこそノアの洪水は如く
なるより外はありませぬ、推譲とさへ言へば直ぐに報
徳かと云ふが天地間の物悉く皆推譲で成り立て居る、
モウ一つ人間乃身体、こをも又推譲で出来て居ります
一人が先づ五合飯を喰ふとすると十五錢は米として七
錢五厘喰ふ、それを一日二日三日と喰ひ込む之れが胃袋へ
落ちて来る、胃の中で能く消化して滓は腸の中へ落
ちて行く、腸が又整理して之れを便の中へ推譲する事

にある、それから善い方の物之胃は之れを血に推譲し
て心臓へ送り込む、心臓又澤山の管を通して身体中
へ回らせ其血液が肉となり骨となり髪のもの毛となり物
を言ふ、之れが皆血液の蔭である則ち善い方の血は
上の方へ推譲し滓は下の方へ推譲して居る、所が若し
強慾な者があつて一升十五錢の米を譲つて堪るものか
と、上へも下へも推譲せず胃袋の中へ入れた儘居た
ら何うなる、段々二日三日経つと氣分が悪くなる一週
間も経つとモウ腹が張り裂けさうになる、ををでも一
升十五錢は米だ上へも下へも推譲してなるものか我
慢して居ると、段々胃が激痛發起して来るををでも本
人は我慢して居ても、それじや迎家族の者が心配えて
醫者に見せる事になる、醫者はこりや瀉腸しなれば
ならぬと言ふても、何に一升十五錢の米を喰つたのだ
といふて應せぬと見る、するとモウ糞詰りて立往生
するより外とないので、此時家族共と手取り足取りて
以て瀉腸の強制執行をするといふ事もある、富豪の客
ン坊があつて一代天下國家町村の爲に出すといふ事を
せず、二代も三代も出さず居る、所か集散は天地
の原則であるから一代二代三代は善いかも知れぬが、
五代も六代も然うなると集散は天地の原則であるから

天か推譲する事になる、則ち天が瀉腸の強制執行す
るといふことになる、ををは何ういふ風にするかとい
ふに放蕩息子が出来る、放蕩息子が出来て二年か三年
の中に大概費つてしまふ、能く世間では放蕩息子に困
るとかいふ事をいふけれ共、私の社會的眼光で見れば
結構なことであると思ふ、則ち天の瀉腸強制執行して
あると思ふ、放蕩息子なる者は散すといふ事だけの任務
を持って産れて来るので、強慾非道の事をして只溜る事
ばかりして居た家の金を散らす爲に天から命令を受け
て来たのである、未だ其外に強慾非道な事をした家には
不時な災難が起つて来る、病氣に罹るとか其他悪事
災難が續いて遂に亡びて終う、其潰れるといふのは一
家の爲には何うか知らぬが、社會學上事業の上から見
れば正當の事で斯くなければならぬ事であると思ふ、
故に何れに向つてか集めたもれは散らさなければなら
ませぬ、二宮先生は然ういふ事ではなく報徳で以て推譲
する事にせよといはれて居る、この推譲といふことは
非常な得なことであると思ふ、得だといふてと値打ち
は減つて終うが實際得があるやうに思ふ、仮令ば茲に
金持があつて五六年も續いて町村の爲に寄附をする、
屢々やつて居ると遂には縣廳あたりから其邊を調べよ

来る、僅かな金でも篤志であるといふ事で終い表彰す
る事にある、推譲といふ意味であると言ふ表彰さる
のみならず其人れ廣告になる事もある、仮令ば鈴木藤
三郎氏と私乃知つて居るのばかりで一万圓ばかり報徳
の爲めに出して居る、鈴木氏の財産は何百万圓といふ
大したものだが何百万圓の財産では一万圓ばかり何でも
取らぬが、我々が地方へ出て行ても篤志人物であるとい
ふ所から、先づ我々は森村市左工門氏とか鈴木藤三郎
氏とかいふ事を、頼まぬもせぬのに廣告して歩行くや
うなものだ、私が昨年丹波の園部で三日間篤志家ばか
ら百二十人だけすぐり出して講話した事が有りました
が、其時恰度鈴木藤三郎君の話しを非常な篤志家であ
るといふ事話して置た爲めに、鈴木君が園部へ醬油
の賣り出をせしやうと云たの汝商賣敵まで大變邪魔を
して、鈴木は山師だとか何だとか悪る口をいひ觸らし
て妨害をされたが、私が篤志家であると話しをまて置
た爲に決して鈴木と山師でないといふ事が解つたやう
なもので、鈴木君が一万圓出したのが何十万圓になつ
て戻つて来るか解らぬ事になる、斯ういふ風に考へる
と推譲といふ事は實に善い事てえやう、能く私共東京
で五六人牛肉を喰ひに行く、慾か人間に限つて推譲を

「に生煮ゑのヤツても何でもドン／＼食ふ、私は初め
 の中人に推譲して弗々やつて居て段々旨い肉汁が出て
 来た時分、後で緩々之を食ふか此の方か餘程得だ
 二宮翁は他譲は致さくは出来ぬといふて居られるか
 推譲といふ活用かなければ天よ向つて報徳する事か出
 来ませぬ、然らば富豪てなくては推譲は出来ぬかとい
 ふに、誰ても出来る何も金に限つた事てな、時間て
 も何ても推譲することか出来る、小學校の教員てあつ
 たら夜學校でも起すか、善い夜學を初めて子弟を教育
 するの推譲てある、又金のない人てあつたら勞力
 を以て道路普請に寄附するとかいふやうに、推譲とい
 ふもの誰にても分限相應に出来ることてあります、
 報徳といふものは至誠勤勞分度推譲と以てする事にな
 せて居る、詰りこの至誠勤勞分度推譲といふことを二
 つに分けると

至誠……………推譲

勤勞……………分度

斯うなる、二宮先生之至誠推譲は道德、勤勞分度は經
 濟てあるか此四つのものか並行調和して始めて報徳か
 出来るか云はれて居る、報徳といへば逆も此れ四つ
 のもの、一言ていへば道德經濟が能を行はせて始めて報

徳といふ事になるものてあります、か能く考へて見れ
 は決して六つかまゐるものてはありませぬ、ろて私の
 考ふるに、或人は斯う思ふ報徳社を作らなければ出来
 ぬと思ふかも知れぬか、何の會ても組合ても起すと共
 に其中に報徳の意味を持ては宜しい、此の主義精神を
 以て家庭に、學校に、田地畑總てのものに應用した
 ら宜しい、報徳社員とか報徳社を起さなければ行はれ
 ぬといふやう報徳社なるものてはありませぬ、私之報徳
 社員を言ふか無遠州の報徳社にも屬して居りませぬ
 其の他何所の報徳社にも屬して居りませぬけれども、
 自分の家庭に自分の學校も日常これを應用して居る積
 りです、飯合は基督教者になれば佛敎を惡く言ふ佛敎
 をやれば基督教を惡く言ふやう思ふか、人間に相違
 のあると同時に宗教も又友達があつて差支ない何も
 惡く言ふ必要はありませぬ、報徳といふものは然うい
 ふ小さなものでない、二宮先生は神儒佛三佐のもの、
 善い所ばかり取て之れで報徳敎といふものを作つ、神
 儒佛正味一粒丸と名けて之れを服用すれば物とま
 て癒えざる病なしと能書きてある、放蕩病、肝癆病、
 無頼病、貧窮病、驕奢病何んでも皆治まると書いてあ
 る、報徳といふもの故以て狭く考へては不可ませぬ、須

らく天下を風靡して行くといふ考へでなければならませぬ。
 それで報徳及び報徳の四大要綱に就ては大概御話した

事と思ふ、之をから二宮先生は社會的理想は何で
 かといふ事御話してやうと思ひます、

第三 二宮翁の社會的理想

何か二宮翁の社會に於る理想であるか、私の考へでは
 豪い理想かあつたと思ひます、先刻來あちらの控席で
 佐久間先生の理想を拜見せられたか、佐久間先生の余
 年二十にして則ち知る一國に繋るを、三十にして則ち
 知る日本全國に繋るを、四十にして則ち知る五世界に
 繋る故と、適かに佐久間先生の抱負理想といふものは
 大したものてあります、二宮先生もこれに負けぬ
 ような理想かあつたと思ひます、二宮先生の社會的理
 想は世の中の貧乏をなくしたいといふ理想かあつたと思
 ふ、貧乏をなくする之れは甚だ六つかしいが是に不
 賛成と言ふ者はあるまい、尤も高利貸や高歩の質屋や
 などと折々不賛成を言ふかも知れぬが、金持が何れ爲
 に租税を餘計に出すか、これと貧乏人の多くある爲よ
 餘計出さねばならぬから、貧乏をなくして終うといふ
 事は世界の最大多数と賛成に違ひない、英國のチャー

ルズブースといふ人が統計を作つた所か、英國の富強
 以てしても百分の九十迄は貧乏人である、日本でも
 貧乏人が中々多い、一体日本では貧乏の程度か社會學
 上定まつて居らないので能くは解らないか、東京の下
 谷近傍の貧民窟だけでも十五万人ある、恐らく東京で
 は百万人は貧民であると思ふ、所かこの貧乏をなくし
 て終いたいと骨を折つた二宮翁は中々豪い人でありませ
 ぬ、二宮先生の幼時は非常に貧困なものであつた、七八ッ
 の年であつたかオヨシといふ母親の里へ一所に招かれ
 て行つた事かある、二宮先生は家は貧乏だから汚ない着
 物を着て行つたので、此れ集つた親戚の中でも家の格か
 ら言へば二番と下る家柄ではなから、台所で食はされ
 るやうな取扱ひを受けた、外の者之格式から行くとい
 だか二の膳付きて座敷で食べて居る、母親は如何にも
 残念で堪らないか歸りかけに話しをしてと不可ぬと口

さい儲けをばよいと云ふ、斯ういふ人はかまでは不可ぬのであります、ラスキンは則ち兄弟姉妹の間柄に於るか如き經濟學でなくては不可ぬと言ふて居るか、二宮先生の所謂天地の道、親子の道、夫婦の道、又農業の道この四つを法則とすると言はれた如く、賣る者も買う者も皆利益があつたと喜ぶてなくては不可ぬのであります、恰度これが有名なラスキンの經濟學の説と相一致して居る、これをよく研究して見まると、親子の道、夫婦の道、天地の道、農業の道これ四つの道が何を喜ぶの道であるのてあります、斯ういふ風に經濟の事を説き人間の同胞兄弟の如きものよ行く方法を説かれてゐる、そゝて人間が只働らくばかりてあく推譲と分度を能く守つて行かねばならぬと言はれたか、貧富共に喜ぶ、政府喜ぶ、民間喜ぶ、學者喜ぶ、無學者喜ぶ、皆悉く喜ぶ、道は報徳の道であらうと思ふ、夫れで近來到る所に斯民會が起るのでありまじやうが、本郡でもこゝに斯民會が出来て發會式を舉げられましたが、會員と會員外とを問はず報徳の道は何人でも、婦人でも子供でも能くこれを應用實行して行くことに願ひたい、これを能く利用して行くと云ふと土木、道路に、産業に、教育に凡ての

事が圓滿に旨く行くことになると同時に、貧乏といふものが無くなつて終いまして、夫れこそ本統の安樂郷となる事は毫も疑ひな事でありませぬ。
一昨日より致して報徳及び報徳の四大要綱、それに又二宮先生の社會的理想につき、その概略を御話し致しまして茲に講了する事に致しますが、皆サンも御健康に各町村は申すに及ばず、山川原野舉げて悉く立派な結果を得られる事を切に望んで已みませぬ。
私に講演はこれにて終りを告げる事と致します。(三月二十六日午後一時三十分より全三時二十分迄)



明治四十二年八月一日印刷
明治四十二年八月五日發行

定價金十二錢

郵税金貳錢

發行人

北澤清

長野縣下伊那郡竜丘村一六七番地

印刷人

磯光原 四郎

長野縣下伊那郡飯田町六五八番地

發行所

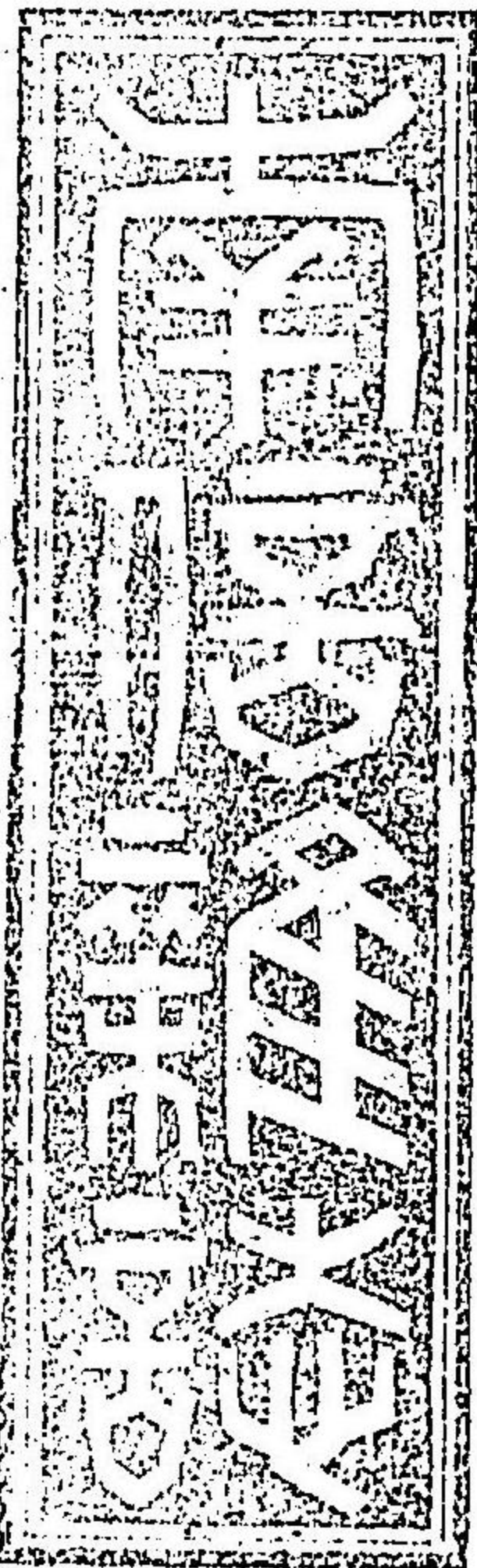
長野縣下伊那郡竜丘村

南信雜誌社

260

338

毎月一
回十五
日發行



定價

書冊前金拾錢 郵稅壹錢
六冊全五拾五錢 全六錢
七冊全壹圓拾錢 全十二錢
廣告料誌末に掲載す

代價拂込法

下伊那管内は特々集金機關トれば葉書申込にて可也
支社發光堂の振替貯金口座へ或譯の手續料を添へ拂込むもよし
其外郵券(五圓)代用又は郵便爲替拂込み御隨意なり

本誌は農藝、商工、政治、文藝、家庭の新世界として發原復た發展、今や地方雜誌として天下
有數の種を博するを得たり。其長を叙すれば、吾信中に於ける文士論客の粹を聚め
政治、經濟、文藝、家庭、其他有らざる各方面の研究に全力を注ぎ加ふるに大懸賞を以て南信
の文壇を賑はしつゝ、あるが如きは正に本誌が公事に致すの赤誠に外ならざるを知るに足らん、
近來本誌讀者の激増を見るに至りたる所以は、もの豈に偶然ならんや、故に曰く本誌を讀まざる
の士は共に經世憂國の談を試むるの資格なきものなりと、請ふ鴻湖の有志來て誌上に光彩を添
へ、併せて我精銳なる活文字を讀め。

本社

長野縣下伊那郡並丘村

南信雜誌社

支社

信濃

發光堂

(振替貯金口座) 第四九六五番

特約販賣所

飯田 文星堂書店 西澤支店 今村書房
赤穂 信陽堂 伊那町 保科日新堂